

尹東柱が現代に問いかけるもの―生誕 100 周年を記念して想う

## Contemporary Messages of Yun Dong-ju: In Commemoration of His 100<sup>th</sup> Birth Year

獨協大学特任教授

沈元燮

Shim Won-sup

<梗概>今年 2017 年は、韓国の国民的詩人として有名な尹東柱の生誕 100 周年である。彼が生きた 20 世紀前半は、抑圧という支配下にあって息苦しい時代であったが、尹東柱は「敵」に対する怒り、憎しみの心を昇華させて神の前に恥のない生き方を貫こうと努力し、最後は血の祭壇に倒れた。現代世界はさまざまな不条理が猖獗を極め息詰まるような時代状況にあり、それへの怒りや不満をテロや物理的な行動として表出する騒々しい世の中になっている。尹東柱の詩は、一瞥すると暗くて憂鬱な雰囲気のある作品が多いように見受けられるが、残された作品群を通して彼の精神の成長を垣間見るときに、詩を通して表現された彼の生き方は、現代人に重要なメッセージを投げかけているように思う。

### 1. 韓国人と詩

本題の尹東柱（ユン・ドンジュ、1917-45 年）の詩について語る前に、韓国人にとっての詩について考えてみたい。一般に韓国文化における詩の占める位置は、確かに現代日本社会におけるそれと比べると、非常に大切に考えられ高い評価を得た文学的な位置が確立しているように思う。

現代日本では俳句や短歌などの詩歌文学が庶民文化として広く根付いていることと比べると、現代詩に限ってみるとその位置づけはそれほどでないように思われる。日本の現代詩は、むしろ詩人とよばれている人々の特殊な文学形式、あるいは個人的な文学形式になってしまい、庶民の感性から乖離しているのかもしれない。あるいは現代詩の表現形式が日本の普通の人々の叙情、考え方、生き方を表現するのに少しかけ離れてしまいフィットしないためにそうなのではないか。

韓国のコミュニケーション文化はどちらかというと「発信型」で、自分の感情や思いを積極的に外部に向けて発信することを楽しむ特徴がある。一方、日本のコミュニケーション文化はやや控えめな姿勢を重んじているような印象を受ける。もう一つの特徴は、冗談、ユーモアを日常的に楽しむ世界があるということだ。初対面の人同士でもすぐに冗談やユーモアを交し合い、情の交わりを楽しむ。私は留学時代に、初対面の日本人にも冗談やユーモアを交えた言葉をかけて相手がとまどった経験を思い出す。

韓国では詩は大衆とともに<息をしている>。韓国の社会には、詩人を目指して研鑽する市井の人がけっこう多くいる。そのため社会の津々浦々に至るまで「三文詩人」が存在

して、詩の創作活動に励んでいる。それはソウルなどの大都会はいうまでもなく、地方の小さな都市空間に至るまで見られる。私自身も、若いころから一人の「三文詩人」としてやってきた道程がある。

このように現代詩というジャンルが、普通の韓国人の日常生活の中にしっかりと生きている。〈大衆とともに生きている現代詩〉という特徴である。さかのぼって、今から1世紀ほど前の尹東柱が生きていた時代は、詩というものが、さらにレベルの高い、高級な文学というイメージがあった。多くの人が憧れを持って詩人を見つめる、そのような社会的な雰囲気があった。

日本も戦前は、もっと多くの詩人が活躍していた。私自身、石川啄木のファンで、彼の詩のいくつかは暗誦できる。韓国で詩に関する講演をするときには、よく日本の詩も取り上げて紹介するが、韓国人たちも感動することが多い。

韓国は現代でもそうした詩文学を高く評価し、昔と比べれば非常に大衆化して庶民の日常生活に息づく形で継承されている。詩は短い言葉からなる文学形式だが、一つの言葉が人の心、琴線に触れて、人の心情・魂に強いインパクトを与えることのできるすごいパワーを秘めているのである。

## 2. 尹東柱の精神世界

### (1) 国民的詩人・尹東柱

最初に尹東柱について簡単に紹介したい。

尹東柱は、1917年12月30日、満洲・北間島の明東村（現在の中国・吉林省龍井市）でクリスチャンの両親の下に生まれた。41年延禧専門学校（現・延世大学校）を卒業し、翌42年4月、日本の立教大学文学部に入学。同年10月同志社大学文学部英文学科に入学。43年7月14日、在学中に治安維持法違反の嫌疑で下鴨警察に（従弟宋夢奎、同じ下宿の高熙旭とともに）逮捕され、翌44年2月22日起訴、同年3月に懲役2年の判決を言い渡された。その後、福岡刑務所に収監中の45年2月16日、満27歳で獄死した。

韓国で尹東柱は、小・中・高校の教科書にもよく取り上げられており、韓国人であれば誰でも知っている「国民的詩人」である。彼が卒業した延世大学校のキャンパスには尹東柱が暮らした寄宿舎の前に「尹東柱詩碑」が建っている（1968年建立）。尹東柱は、延世大学校のイメージの一つとなっていて、同大学を目指して勉強している多くの学生の頭には「尹東柱の母校」という観念がある。

尹東柱が「国民的詩人」として韓国人に広く愛されている理由にはいくつかある。その一つは、彼が生きた時代である「大日本帝国」支配下で、自分の民族、国の独立を守ろうとした気概への共感である。そしてその価値は、現在でも若者たちに発信し続けている。

第二は、立派な詩人として尊敬されているというよりは、むしろ自分たちと同等な存在としてより一般の庶民に愛されている。何よりも彼の詩は非常に分かりやすい。彼が詩を通して表現した世界は、故郷に対するノスタルジア、思春期の夢、自分探し、自分対す

る恥の意識など、一般の人々が近づきやすい親近感の溢れる叙情の世界であった。その点に多くの庶民が魅力を感じるのではないか。

## (2) 犠牲の祭壇に上った詩人

尹東柱の同時代人として、李陸史（1904-1944年）、韓龍雲（1879-1944年）という詩人がいるが、彼ら3人は「暗黒期の星」と呼ばれている。

まず、李陸史は朝鮮の大儒学者・李退溪の直系の子孫で、抗日詩人と言われている。日本や中国の大学にも留学したエリートだが、自ら独立運動に関与した経歴をも持っている。そのため十数回も逮捕、投獄生活を余儀なくされ、最後は北京の日本領事館監獄で獄死した。彼は詩の創作を通して、「抗日運動のためならいつでも死ぬ覚悟ができています」と宣言した。

もう一人の詩人・韓龍雲は仏僧で、1919年3月1日の三・一独立運動においては、仏教界を代表して行動し独立宣言に記された民族を代表する33人の一人として数えられた。三・一独立運動のときに日本の官憲に逮捕され数年後には釈放されたが、その後も活発な抗日運動を展開し、日本に協力している知識人がいれば「裏切り者」と叫んで頬を殴ることもした。しかし光復（終戦）を見る前に世を去った。

このように李陸史と韓龍雲は、直接的な抵抗運動を展開しながら、詩などの文筆活動を行い、命がけで日本帝国主義を批判した詩人だった。ところが、尹東柱はそうではなかった。具体的な抵抗運動は言うまでもないが、詩の言葉の中にも日本帝国主義の支配体制を直接批判する言葉は一つも見られない。そこに尹東柱なりの魅力、また個性があると思う。

尹東柱が1943年7月に京都で治安維持法違反の嫌疑で逮捕された理由は、友人との会話の中に、朝鮮人徴兵や民族文化圧迫などの政策を非難したり、朝鮮独立の必要性を訴えたりしたことが民族運動の扇動に当たる罪だとされたためだった。つまり一緒に逮捕された従弟との会話などが密告されて逮捕となり、最後は獄死したのだった。言葉を換えていえば、平凡で善良な普通の朝鮮青年が、血だらけの犠牲の祭壇に上って自分の首を生贄として捧げたのである。そのために悲劇性がさらに高まった。この点は、李陸史や韓龍雲とは際立った違いであり、そうした尹東柱の特徴ゆえに、親近感を持たれ国民に広く愛される存在となったのだと思う。

韓国人の心を理解するためには、そういう人たちの心を知る必要がある。韓国人はこのような人たちを大事にしている。その心が分かれば、さらに日韓の相互理解が進むだろう。

## (3) 「序詩」

尹東柱の作品の中でも最も愛されているのが「序詩」である。彼が詩集出版のために18篇を選び、序文に代えて書いたのがこの詩で、延禧専門学校時代を総決算する意味があったと言われる（1941年11月作）。

死ぬ日まで 空を仰ぎ見  
一点の恥無きことを  
葉あいにかかる風にも  
私は心苦しんだ。  
星を歌う心で  
あらゆる死にゆくものを愛さねば  
そして わたしに与えられた道を  
歩み行かねば

今宵も星が風に吹き晒される。

これは大学卒業するときの詩といわれるが、20歳そこそこの普通の若者が詠った詩とは到底思えないほどで、まるで行者のような感じさえする。

「死ぬ日まで 空を仰ぎ見

一点の恥無きことを」

尹東柱が大事にしていた夢は、神の前で恥のない人間になることであった。

「葉あいにかかる風にも

私は心苦しんだ」

理想が高ければ高いほど、払うべき代価も大きくなる。神の教えを守れない場合が多い日常生活は、それ自体が尹東柱を試す戦場となる。毎日体験する些細なこと、すなわち「葉あいにかかる風」にさえ苦しみを感じてしまう。理想を守れない自分が憎らしいからだ。

「星を歌う心で

あらゆる死にゆくものを愛さねば

そして わたしに与えられた道を

歩み行かねば」

生きている生命体に迫ってくる最大の悲劇は死だ。われわれが日常生活の中で覚える全ての恐れは、この死に繋がっている。しかしこの死に繋がる〈死にゆくもの〉を愛するということは、実は人間という生命体全体を上から慈悲の目で見下ろすという姿勢になる。ここに尹東柱のまじめな信仰者らしい姿が現れている。

戦況が激しさを増し大変な時期にあつて、生きることさえままならず、いつ死ぬかも分からない時代状況の中で、このような世界を詠ったのである。残された尹東柱の写真の顔を見ると、神父や若い僧侶のような印象を受けるのには、そのような彼の精神の成長のドラマがあつたからだと思う。

#### (4) 内面の闘い

一人の人間として外国の支配と圧迫下にあつてそれに抵抗するのは、当然の理であろう。

それは自分の民族の独立を守ろうとする、人間としての本能の発露ではないか。自由に生きることの選択は人間にとって重要な価値であるが、それを否定されたとき、できなくなったときの感情が「怒り」だろう。相手を憎む感情が湧くのは人間として自然のことである。(日本の支配下の) 当時の韓国詩人の詩を読むと、抑圧に対する怒りがにじみ出ているか、暗示されている場合が非常に多い。

ところが尹東柱の詩にはそれがない。その理由は一体何か。私は彼がキリスト教徒であることに起因すると考える。キリスト教の中にもさまざまな教派があるが、彼が信仰したのは(革新的な監理教などではなく) 保守的な伝統を持つ長老派だった。聖書を文字通り信ずるような保守的な信仰であり、彼は妥協なく信仰を貫いた。そのようなキリスト教徒にとっての一番の願いは、<キリストに倣うこと>、キリストに倣った生き方をすることだった。イエスが自らの体をもって見せてくれた十字架という模範をモデルとして、生涯ずっとイエスのみあとを追いかけていく、それがキリスト者としての人生だ。

イエスは奇跡を起こす権能、力を持っているにもかかわらず、十字架上の死の道を選んだ。神のひとり子として十分な力と権威が与えられているにもかかわらず、「だれかがあなたを右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」(マタイによる福音書 5:39)「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイによる福音書 5:44)と、絶対的な無抵抗の愛で対せよと教えた。それは<絶対命令>だった。それは普通の人間には非常に実践不可能なことであろう。

イエスの示された絶対命令と、弱い人間としては実現できない本能の世界との間にあって、キリスト教を信じる尹東柱にとってそれは深刻な悩みだったと思う。イエスが最終的に示した教えは何かといえば、暴力を振るって支配しようとした存在に対して自分の命を捧げることだった。そのことが彼の詩「十字架」の中に如実に表されている。

## 十字架

追いかけてきた陽の光なのに

今 教会堂の尖端

十字架にかかりました。

尖端があんなに高いのに

どうして登ってゆけるのでしょうか。

鐘の音も聞こえてこないのに

口笛でも吹きつつ うろろうろして

苦しんだ男

幸せなイエスキリストの

ように  
十字架が許されるなら

頸を垂れ  
花のように咲き出す血を  
たそがれ行く空のもと  
静かに流しましょう

「十字架を見上げる資格もない」。そこには彼の謙遜な生き方がそのごとく表されている。万が一、「私のような惨めな人間にもイエスのような十字架の光栄が許されるなら、私もひそかに十字架に上って自分の血を流しましょう」というのだ。

これは文字通りにイエスの後を追いかけてやろうとした彼の告白である。そのような道を歩こうと思っている人が、「敵が憎い」「復讐しよう」と言ってはいけないわけだ。その思いを我慢しながら、敵を愛さなければイエスの生き方に倣うことにはならない。これはまさに修行だ。彼は十字架に上って日本と韓国の架け橋の星となった。結局、結果的には永遠なる勝利を得たことになったのではないか。

そこに彼の精神性の根源があり、キリスト者としての生き方がもっとも本質を表しているのではないか。われわれ普通の人には、そのごとく生きることは不可能に近いかも知れない。そういえば、非暴力は、むしろ一番積極的な抵抗の仕方といえるかもしれない。命を相手に捧げること、これより積極的な抵抗はなかったのではないか。歴史において、尹東柱の生き様は、イエスの模範と同じく数百年にわたって残るに違いない。復讐は復讐を生み、それを繰り返すだけだ。

キリスト者の中には「自分は十字架を背負ってイエスのみあとを追いかけていないといられない」などと言いながら生きる人もいるが、そのようなことは簡単に実践できる話ではない。彼は「私には資格がない」などと控えめに表現しつつ、イエスの十字架の死を見上げながら果たして自分もその通りに生きられるかと自問する。非常に謙虚な姿勢が、また多くの人々の心をひきつけるに違いない。自分に対しては厳しい目で見つめる姿勢。そのような人は滅多にいない。

### 3. 現代に生きる尹東柱

21世紀に入り、現代世界は相互不信、移民や難民に対する他者排斥の感情に見られるような排他的な思い、憎しみが蔓延するような世界になっている。それを譬えてみれば、下り坂を転げ落ちる高速バスに乗っている人類といえるかもしれない。このような時代にある今こそ、尹東柱の生き方から学ぶことは多い。

一つは二度と私たちの周りに（罪がないのに犠牲にされた）尹東柱のような人が現れてはいけないということである。歴史上には数え切れないほどの「尹東柱」がいた。世界に

は今現在も罪なく死にかけている若者たちがいっぱいいる。善良に生きようとする人々を暴力で抑圧する政治システムが生まれているとすれば、それを必死で防がなければならぬ。「尹東柱たち」が自分の良心を守りながら生きることができる社会を作るため、平和を守るために、みんなが手をつないで抵抗することだ。

尹東柱は（キリスト者として）自らの命を捧げた。普通の凡人は自分の命を捧げることが簡単にはできないが、もし（やむを得ない状況の中で罪もなく自分の）命を捧げることになったとすれば、それもまた一つの尊い生き方と言える。

尹東柱は、生前も死後しばらくの間も、全く名の知れた詩人ではなかった。専門家の目で見れば、彼の詩はテクニカルな面で言えば、A レベルとはいえない。もし彼が現代に生きた詩人として詩壇にデビューしようとしたら、果たして有名になれたかどうか。しかし彼の詩の中に込められた真心は光り輝いた。歴史のアイロニーとしか言いようがないが、無名の詩人が数多くのプロフェッショナルな詩人たちに勝っているという現実。尹東柱はプロが届かないほどの高みに行ってしまったのだ。

<あらゆる死にゆくもの>とは地上の存在である人間であり、人間の特性が「無知」と「愚かさ」と「死」にあるとするなら、尹東柱がまずやるべきことは、愚かな自分を許すことだった。これは「たやすい」ことではない。精神上的の大きな飛躍がどうしても必要だ。尹東柱はほぼ最後の時期に書いた「たやすく書かれた詩」の中でこういう。

灯火をつけて 暗闇をすこし追いやり、  
時代のように 訪れる朝を待つ最後のわたし

私は私に小さな手をさしのべ  
涙と慰めで握る最初の握手

尹東柱はこれ以上自分を責めたり、過酷にせき立てずに、自分をありのまま抱き入れるようになったのではないか。逃避せず、自分を直視し、ついに希望の原理を自分の中から見つけ出したのである。

現代という時代にやるべきことをどう果たすのか。もう私たちには他国のことなど、心配している余裕がないかもしれない。韓国人は韓国人として、日本人は日本人として、それぞれ自国でやるべきことがある。「尹東柱」たちを死に追い込んだような社会の出現を二度と許してはいけない、ということだ。日・韓の人びとがこういう自覚に立って連携していくことを、尹東柱のような無名の青年の死（詩）が教えてくれたのかも知れない。「歴史の光」とは、こういうものではなかるうか。

（2017年5月12日）

プロフィール シム・ウォンソップ

1957年韓国江原道生まれ。延世大学大学院修了。韓国近代詩専攻。文学博士。日本では東

京外国語大学に学び、早稲田大学文学部客員教授、仁荷大学大学院研究教授を経て、現在、獨協大学国際教養学部特任教授。主な著書に、『原本李陸史全集』『写真版尹東柱自筆詩稿全集』『韓国留学生文学者の大正・昭和体験』『秘密にしていた話』『阿部充家と朝鮮』他多数。